

函

館から道南襟裳岬を通って途中名所を訪ねながら根室に至り、網走を越えて道北宗谷岬を目指した。北海道の形は魚のエイのように見えるのだが、そのうんと突っ張った片翼の突端が宗谷岬だ。

夏に松江のある居酒屋で飲んだとき、カウスターの隅にバイクの写真が置いてあるのに気づいた。それをきっかけにして七十がらみの主人がニヤニヤして、「今度こいつで宗谷岬に行こうと思ってるね。」と言った。楽しみで仕方ないらしい。

「いいなあ。でも何にもないよとだけどね。」

言ってから、しまった、と思った。つまらんよあんなところ、という意味ではない。どう取り繕うかと焦ったが、幸い、だから行くんだとでも言うように、主人は豪快に笑った。

宗谷岬には北に向かって延々と伸びる海岸道路をただただ走る。右手には細く伸びる砂浜とオホーツクの海が、左には草原や森という光景がずっと続く。カブを何時間走らせても変わらない。たまに点在する家屋が見えたり、海岸に昆布が度肝を抜くほど大量に干してあつたりしたが、すぐに元の光景に戻る。

オホーツクの海は、黒に近い紺色で、冷たく重そうに見えた。浜頓別の近くで暖簾を出している食堂を見つけた。朝ご飯にカレーライスを注文した。客はぼく

一人だった。

白い肌着に前掛け姿のがつしりした体躯の老人がテーブルの上にカレーライスを置くと、はず向かいに自分も座って、朝早くから店を開けているのを自慢した。頭も眉も白いが声は太く力強かった。

「俺に言わせりゃ、十時開店なんてのは怠けだよ。」  
カレーは、どうと言うこともない味だったが、朝から温かい米が食べられるだけでもありがたかった。老人は、食べているだけの脇で、その後もあれこれしゃべった。

「今度は冬に来なよ。」

別れ際に老人はそう言っただけで微笑んだ。ほんとうのこは冬だからな、とぼくには聞こえた。きつとそうだろう。次また来るとしたら冬のここに立ちたい、と思っただ。

宗谷岬に至り、稚内を越えると、風景は反転する。右手に海、左に草原や森となる。反転したのは風景ばかりではなかった。ぼくの気分もがらつと変わった。海がオホーツクから日本海へと変わった途端、帰り道になったのだ。この海は松江の家につながっている。そう思うと、まだまだ旅は続くのだが、折り返し地点を過ぎたという気になったのだった。海もまた、色も温度も質量も変わったように見えた。

木幡智恵美

義母の異変(3)

四週間ごとに血圧の薬をもらいに行くかかりつけ医で、尿に血が混じっていることを相談した。かかりつけ医は、しばらくは様子を見て、量が増えたり痛みが出てきたりしたら考えましようと言われた。どのパットもピンクに染まっていけない日もある。「暑い」「寒い」との訴えはあるが、痛みの訴えはなく、一週間ほど様子を見た。

そんな中、島根県で、新型コロナウイルス感染者が九十一人という衝撃的なニュースが走った。高校で起きたクラスターだ。その日は孫たちを潮水につけるため、出雲に行くことにしていた。連日の猛暑、この日も三十五度を超える予報、絶好の海日和だ。義母をデイスーパービスに送ってから、娘と孫三人を連れて出雲の家に向かった。道中、孫たちの手をしながら、娘に義母のことを話す。「鮮血だったら、出口に近いところかな。専門医に見てもらったら」「ちよつと量が増えた気もするから、明日は泌尿器科に連れて行ってみるわ」。孫たちの相手や世話に追われ、話はそれきりになった。

まずは、畑に寄って水やりをし、作物を収穫してから家へ。着くと、すぐに着替えて海に行った。打ち寄せた流木やらゴミやらで浜は汚れている。コロナ禍で、例年行われている浜掃除が出来なかったのだろうか。それでも、ゴミを避けながら寛大はジジに付き添われ、波打ち際へ走っていく。娘が実歩を誘うが、「こわい、こわい」と大騒ぎで、パラソルの下から出ようとしめない。娘は宗矢を連れて波打ち際へ。生後七箇月の宗矢は訳も分からないまま潮水に浸けられ、わーんと短く泣いた。私と砂で遊んでいた実歩も、結局は母親に無理やり水の中に入られ、これは大泣き。一応皆潮水に浸かった。これで汗疹が治るといいが。シャワーをしてさっぱりしてから松江の家に帰り、昼食、お昼寝といったものように過ごした。

翌日、二人掛かりで義母を車に乗せ、泌尿器科に連れて行っただ。「ああ、ここか」と、義母以前何度か膀胱炎に罹ったことがあり、通っていた医院だ。医院の車椅子を持ってきて、義母を車椅子に乗せ、受付で消毒と検温をしてから中に入る。

診察の結果、エコーで膀胱を見ると、影があるとのこと。これが血腫なのか何なのかは、よく分からないらしい。抗生剤と利尿剤を処方された。

その夜、娘から電話があった。「お祖母ちゃん、どうだった」



30代フリーター やあ、ジイさん。

「多くの人が納得し喜んでくれる状況ではない」という理由で、結婚式などの儀式を一切せず、婚姻届を出すだけにした秋篠宮の長女の眞子と小室圭の結婚は、皇室の権威の著しい低下をあらわにした。われわれがうんと言わないう結婚は許さない、と相当数の国民が考えていることを推察させる。

年金生活者 背景には何度も言ってきた国家から個人への権力の分散がある。資本主義の高度化とテクノロジーの発展は選択的消費を必需的消費と肩を並べるところまで増大させた。国民が自らの選択的消費を一齐に控えれば、ときの政権を倒すことができるようになったということだ。それは国家の権力の一部が諸個人に分散したことを意味する。

分散した権力を手にした諸個人はそれに相応する処遇を求めるようになり、自分たちを軽んじる政府、政権、政党などを許さなくなった。その対象には皇室も含まれる。今後は皇族だけ

への非難を「人権意識の低さ」と批判し、天皇や皇族にも生まれながらにして人権があるのに、それがほとんど奪われている、とする意見を表明したと報じられている（「弁護士ドットコムニュース」、10月1日）。

天皇や皇族の人権を奪っているおおもとは日本国憲法第1章の天皇条項だ。その同じ憲法が国民主権をうたっているという矛盾が「税金で暮らしながら国民の納得しない結婚をするのか」といった「主権者」からの非難を噴出させた。

そうした矛盾を解消するには憲法第1章を削除して、天皇制を廃止するしかない。廃止しても、皇室を宗教法人か財団法人にでもして「民営化」すれば、多くの国民が支援を惜しまないはずだから、天皇も皇族も生活に困ることもなく、品位も保てるだろう。

30代 皇族の結婚をめぐって国民の賛否が割れ、日本国憲法に定められた「日本国民統合の象徴」の足もとが国民の「分断」の震源になるという事態

でなく天皇に対しても、不満があれば遠慮せずぶつけることがありふれたことになる可能性がある。

戦後の復興に向けて国民を励ました昭和天皇、国民の平和への希求をあと押しした先代の天皇はともに国民の気持ちを支えたという意味で力のある「象徴」だった。これに対し、これからの天皇は現職を含め、それだけの力を持たない文字通りの「象徴」としての色彩を強めていくだろう。

30代 眞子が「複雑性PTSD」と診断されたと宮内庁が発表した。小室圭との結婚をめぐって「誹謗中傷と感じられるできごとを、長期にわたり反復的に体験」したためとしている。

年金 SNSには「誹謗中傷と感じられるできごと」が枚挙にいとまがないほど並んでいる。代表的なのは「税金で生活してきたくせに国民が納得しない結婚をするのは許さない」といったぐいものだ。

「税金で生活」しているのは議員や官僚も同じだ。その結婚が納得いかな

は前代未聞だろう。

年金 憲法はひとつの体系をなしており、一個所にほころびが生じると全体が揺らぐ可能性がある。とりわけ天皇の地位を定めた1条と戦争放棄をうたう9条とはワンセットの条項として制定された経緯があり、1条のほころびは9条のそれと連動する可能性がある。

1条と9条がワンセットという意味

という理由でバッシングされたという話は聞いたことがない。彼らが国民に奉仕する仕事をし、その報酬を税金から受け取っているという建前があるからだろう。

天皇や皇族は目に見える形で国民に奉仕する仕事をしているわけではない。それにもかかわらず、税金から生活費などが支払われるのは、一般の国民より上位の存在であること自体に価値があるとみなされ、それに対する対価には公金が充てられるべきだと考えられているからだ。憲法の定める「象徴」はそうした「上位性」を暗黙の前提としている。

彼らが奉仕の仕事をしていないぶんだけ国民は税金で彼らを養うことに厳しい条件をつける。そのひとつが私事にまで踏み込んだ注文だ。結婚が「上位」の存在にふさわしいかどうかを問い、そうでなかつたらダメ出しをする。眞子と小室はその嵐にさらされた。

「明日の自由を守る若手弁護士の会」というグループが、ふたりの結婚

は、アメリカが日本を軍事的に無力化する見返りとして天皇制の維持を容認したことを指す。わが憲法は天皇をいただく前近代性と、非戦・非武装をうたう超近代性との均衡によつて成り立っている。

したがって、今回の眞子・小室の結婚問題のように、日本国民の「統合」どころか「分断」を引き起こすような事態が出現すると、9条もその理想から逸脱して形骸化する恐れがある。

いま眞子と小室を擁護する声は左派・進歩派に多く見受けられる。つまり9条護持派に多い。1条と9条の密接なつながりを示すものだ。もし天皇制の廃止を求める声がこれから出てくるとしたら、左派・進歩派からではなく、右派・保守派の一部からのような気がする。

SNSなどでふたりの結婚を批判する主張を読むと、国体を護持したいがゆえの批判が多い。だが、皇族批判は国体への批判を否応なく含んでしま

ニュース日記 803  
中村 礼治

## 象徴の変貌